

Sandel (2007) の「被贈与性」概念をめぐる コミュニタリアニズム的価値観の社会心理学的検討

柴内 康文

1. 問題

本論は、公共哲学であるコミュニタリアニズムの代表的な論者として国内でも知名度の高いマイケル・J・サンデルの論考に現れた、社会的連帯をめぐる一つの興味深い命題の検証を、社会心理学的なアプローチで探索的に試みることを目的とする。ここでは、コミュニタリアニズム、特にサンデルのその特徴についてまず論じた上で、本論が扱う命題について提示し、このテーマが持つソーシャルキャピタル論や価値観研究、また社会心理学的概念に対する含意などについて議論する。

1.1 コミュニタリアニズムとマイケル・サンデル

コミュニタリアニズムを一言でまとめれば「共同体の価値を重視する政治思想」（岩波社会思想事典）ということになるだろう。コミュニタリアニズムの立場を取る代表的な論者としては、哲学・思想の分野ではアラスデア・マッキンタイア、チャールズ・テイラー、マイケル・ウォルツァー、また社会学ではアミタイ・エツィオーニなどが挙げられるが、中でも一般向け含めた数多くの著作で知られるのがマイケル・サンデルである。サンデルは特に、リベラリズムの立場を取る思想家であるジョン・ロールズに対する批判者としてその立場を確立したことで知られている。

大まかにまとめると、ロールズは正義の原理を基礎づけるにあたって、原初状態における「無知のヴェール」と呼ばれる仮想的状況を導入する。人々が自分の置かれている能力や経済、社会的なさまざまな特性や自らの特殊性について知りうるができないという状況である。この状態において人々が合意できる正義を「公正としての正義」とロールズは捉え、その内容として、自由に対する平等な権利が維持されるべきとする「第一原理」、および機会の平等と、もっとも恵まれていない場合に期待できる便益が最大となるような条件下での格差が是認されるという「第二原理」として定式化した (Rawls, 1999)。この原理は、自由と両立する一定の福祉政策を基礎づけるものとして、現代のリベラリズムが広く受け入れられる背景となった。

一方でサンデルはこの「無知のヴェール」という仮説的状況を「負荷なき自己」という言

業を用いて批判し、そもそも自己のさまざまな特性から離れた形で存在する自己を仮定することができないことを主張し、特に自己を構成し、位置づけるコミュニティによって共有された「善き生」、共通善こそが正義を決定しようとした (Sandel, 1998)。このような観点から、価値におけるコミュニティの存在を重視する立場がコミュニタリアニズムと呼ばれるようになり、またリベラリズムとコミュニタリアニズムの間では「リベラルーコミュニタリアン論争」と呼ばれる大きな論争が巻き起こることとなった (Mulhall, & Swift, 1996)。

サンデルの関与という観点から見れば、おおよそ上記のような経緯の中でコミュニタリアニズムはリベラリズム、さらには経済的自由を強く重視するリバタリアニズムに対抗する立場の政治思想として、おおよそ 1980 年代以降一定の地位を占めるに至っている。一方でコミュニタリアニズムの考え方は固有の状況や文脈を重視する傾向、また省察や参加を通じて共通善を見いだそうとする実践的側面があるためか、その具体的な内容について、例えばそのような立場をとる人間であるかどうかを社会調査的な手法で捉えようとした場合には、対置されるリベラリズムやリバタリアニズムと比べて操作的に定義できるような明確さを持ちにくい側面があるように思われる。関連してコミュニタリアニズムは、場合によってはコミュニティの多数派によって自由を抑圧する保守的で硬直的な思想、立場であると批判されることも論争の中ではこれまで少なくなかった。一方で、コミュニティへの関心の高まり、また「きずな」あるいは「友愛」などの言葉で近年関心を持たれることも少なくない、新しい形の公共性を重視する立場は当然コミュニタリアニズムとも通じるものがあると考えられるが、これらも単純に「個人 (の自由) 対 コミュニティ」のような軸によって捉えられるものとは必ずしも言えない側面があるように感じられる。

1.2 サンデル仮説：被贈与性と連帯

ここで、サンデルが比較的明確な形で踏み込んで、具体的な価値観とコミュニティとの関連性について議論を行った著作が、2007 年に発表された *The Case against Perfection* (邦訳書題『完全な人間を目指さなくてよい理由』) であると思われる (Sandel, 2007)¹⁾。本書は遺伝子工学などを応用することによって可能となる、健康を維持し回復するような「治療」以上の人間の改良や増強である「エンハンスメント」(enhancement) が、コミュニタリアニズムの立場からはどうして許容されないと考えられるのかを論じた著作である。リベラリズムのような、人間の個人としての自由、決定を重視する立場からであれば、自己の選択としてそれを肯定するロジックも引き出しうると考えられるからである。ここでサンデルが提起した独自の概念が「被贈与性」(giftedness) であり、それと社会的な連帯 (solidarity) が密接に関連しているということがその骨子となる。同書にこの概念が登場する部分を以下に引用する。

結局のところ、どうして成功者は、社会のもっとも恵まれない人々に対して、何らかの責務を負わなければならないのか。この問いに対するもっとも説得力のあるひとつの回答は、被贈与性の観念に依拠するところが大きい。… (中略) …

このように考えてみると、連帯と被贈与性の結びつきが明らかになる。われわれの天賦の才は偶然なのだという強固な念——誰一人として自分自身の成功に対する完全な責任を有している者はいないのだという意識——こそが、成功は有徳さの証であり、裕福な人々は貧困な人々よりもいっそう富の享受に値するがゆえに裕福であるのだという独善に似た思い上がり、能力主義社会の中に醸し出されてくるのを防いでいるのである。

… (中略) 偶然を選択に代えることが可能になると、人間の能力や偉業の被贈与的性格は薄らいでいけだろし、おそらくはそれとともに、われわれが自らのことを運命共同体の一員として理解する能力も薄らいでいけだろ。成功者は、自分は自分で作り上げたもので、自己完結しているのだ、またそれゆえ、自分の成功は完全に自分の責任によるものだ、と今以上に考えるようになるだろ。… (中略) … 人々が自らの才能や幸運の偶然性に思いを致すところから生まれる現実の連帯も蝕まれていけだろ。(訳書 p95～)

上記に述べられているように、サンデルはエンハンスメントには社会の連帯を阻害する志向性があり、人間の能力が与えられたものであるという「被贈与性」の観念が連帯の基盤であると指摘する。その上で「われわれの天賦の才は偶然なのだという強固な念——誰一人として自分自身の成功に対する完全な責任を有している者はいないのだという意識」が弱まると、「自らのことを運命共同体の一員として理解する能力」が薄らぎ、「人々が自らの才能や幸運の偶然性に思いを致すところから生まれる現実の連帯」が蝕まれると議論している²⁾。

これは人々が個々に有する「被贈与性」のような信念が、全体として見ると社会レベルの影響を及ぼすという形の命題となっている。これは政治思想・哲学に端を発した議論ではあるが、社会心理学がこれまで扱ってきたような社会レベルと心理レベルの相互規定関係に関する視座を提供しており、また実証的アプローチによって検証することも可能な側面を有している。また、単に形式としての親和性ということのみならず、この「被贈与性」の信念は、社会心理学研究においてこれまで扱われてきた問題やテーマともいくつかの点で関連しているということもできるだろ。以下ではこの「被贈与性」と連帯をめぐる問題を扱うことの意義について議論する。

1.3 「被贈与性」をめぐる検討を行うことの意義

この問題を検討することの意義は大きく分けて以下の3点である。まず第一に、ソーシャ

ルキャピタル論との関連性という観点からである。コミュニタリアニズムは、コミュニティにとっての善、コミュニティの重要性を強調するという立場から、いわゆるソーシャルキャピタル論と共通する部分も大きいと考えられており、実際にそれぞれを中心のテーマとする論考においても、他方との類縁性がこれまでも議論されてきた(宮川, 2004; 菊池 2007)³⁾。ここでソーシャルキャピタルを捉えるにあたっては、ネットワークや組織そのものに関わる「構造的ソーシャルキャピタル」と、人々の中に内面化された心理変数としての「認知的ソーシャルキャピタル」に二分して捉えることが少なくない。このうち後者についてはこれまで、信頼や互酬性の規範が代表的に取り上げられてきたところであるが、価値観等とも深く関わるこれらの変数を含め、ソーシャルキャピタルの信念システムとしての構造や発展変化、また構造的ソーシャルキャピタルとの相互規定関係については、さらなる検討が必要であると考えられる⁴⁾。ここで、サンデルの展開した議論においては信頼や互酬性といったこれまで中心的に扱われてきた変数ではなく、「被贈与性」の信念という心理変数が、ソーシャルキャピタル概念にもつながる「連帯」と関わっているということを議論しており、ソーシャルキャピタルのメカニズムを理解する上で示唆を与える可能性があると言えるだろう。

第二の意義としては価値観研究に対して与える視点という側面を考えることができる。これまで盛んに行われてきた社会心理学、また実証的政治学研究における価値観研究においてはロナルド・イングルハート流の、物質主義から脱物質主義的価値観をめぐる議論が一つの大きな流れであったと言えるだろう (Inglehart, 1990)。脱物質主義的価値という概念の妥当性についてはスコット・フラナガンはじめこれまで多くの議論が存在してきたところであるが、このような価値観変容をめぐる議論を総括する上で、松谷 (2009) はこれまでの研究においては個人的自由の軸をめぐるの、「権威主義 (もしくは伝統主義) から自由主義 (もしくは反権威主義)」へという価値変容⁵⁾について大きな関心が示されてきたとする。なお同論では個人主義的人間観の人々への浸透を仮説化する中で、政治思想の分類に用いられることが多い「ノーラン・チャート」を引いて個人的自由と経済的自由を重視する個人的 (あるいは文化的) 自由を重視する立場としてのリベラリズムと、加えて経済的自由を重視する立場としてのリバタリアニズムを付置している。

もっとも、これらの政治思想、あるいは価値観付置において、コミュニタリアニズム的思想やあるいはコミュニタリアニズム的価値観をどのように定位できるかは必ずしも分明ではないように思われる。先述の通り、コミュニタリアニズムはリベラリズムに対する批判として出てきた経緯もあり、保守性や前近代性を内包する危険性のあるものと捉えられることも少なくなかった⁵⁾。しかし、近年巷間に関心を持たれるコミュニタリアニズム的価値は、必ずしもリベラリズム的価値の対極に位置づけられるものではないように考えられる。実際、Delanty (2003) はコミュニタリアニズムの類型を整理する中で、その類型としてリベラリズムに対する修正的立場としての「リベラル・コミュニタリアニズム」は、リベラリズムの潮流との

間に実質的な違いを有するものではなく、また個人主義そのものに対して敵対しているわけでもない指摘する。したがって、コミュニティ・共同体の関心への高まりの中で、リベラリズム的価値と両立するコミュニタリアンの価値について検討するためには新たな分類軸、また社会—心理的メカニズムを指定しなければならないが、先述したように個人的自由もしくは経済的自由の重視、という（操作的）定義の比較的容易な概念と比べたときには、この作業は困難であるというのが実際のところであるだろう。「被贈与性」をめぐる検討は、価値観としてのコミュニタリアニズムの社会—心理メカニズムに一定の示唆を与える可能性がある。

「被贈与性」をめぐる検討の第三の意義として、このコミュニタリアニズム的価値と、心理学研究において従来検討されてきたテーマとの接合可能性が挙げられる。一例としては具体的には外的／内的帰属の問題、また Locus of Control (LoC) をめぐる議論があるだろう。前述のサンデルの命題は結局のところ、人間の達成（あるいはその原因としての能力）が自らの完全な統制の及ぶものではない、という信念に関するものであるとすることができる。一方で「自身の行動と強化の生起が随伴しており、強化の統制が可能であるという信念」（鎌原・樋口・清水, 1982）は LoC と呼ばれて Rotter (1966) 以来、心理学研究の対象となってきた。基本的に LoC は内的統制—外的統制の連続体として次元性が仮定される概念であるが、この統制感を強く抱くことは精神的健康と関連し、無力感に対する抵抗をもたらす個人的特性であると想定されている。実際日本版の LoC 尺度を開発した鎌原ら (1982) はその信頼性・妥当性の検証作業の中で、内的統制が抑うつ尺度との間に負の相関を持つことを見いだしている。ここで、彼らは帰属傾向との関連について検討しているが、学業達成については内的統制の高い人間が努力への帰属を行いやすいという予測通りの結果を得たものの、友人関係の出来事をめぐる帰属においては、好ましい状態を努力に帰属するという有意な結果が得られなかったことを報告している。他者との関係性をどのように捉えるかは、単純な統制感とはまた異なる様相を持ちうるということが示唆されているが、自己の達成について（一定部分が）他者、もしくは（「運」といったニュアンスを持つ）天賦のものであるという信念を持つことが、他者との関係性において重要な意味を持つというサンデルの命題は、このようなこれまで検討されてきた現象のメカニズムの理解に対して、興味深い考察を与える可能性があるだろう。以上のような問題関心に基つき、Sandel (2007) の立論に対して実証的検討を行うことを試みる。

2. 方法

2.1 調査法とサンプル

クロスマーケティング社のオンラインパネルを利用したインターネット調査を行った。調

Sandel (2007) の「被贈与性」概念をめぐるコミュニタリアニズム的価値観の社会心理学的検討

査対象は登録パネルのうち東京都、および埼玉／神奈川／千葉県の一都三県に居住する者で、年代ごとの20代～60代の5区分、および男女2区分の組み合わせで10セルを構成し、それぞれのセルに対して均等に120人、全体で1,200人の回答が得られるように割り付け回収を行った(目標数到達によって調査打ち切り)。実査は2012年12月22～23日に行われた。

2.2 変数

以下に、本研究で行われた調査における質問項目のうち、特に本論における分析に用いたものを中心に説明する。主たる変数である「被贈与性」関連項目以外については、変数構成の結果も合わせ述べる。

【被贈与性に関する項目】

Sandel (2007) に従えば、「被贈与性」とは自らの能力や達成について、それが偶然に起因するものであり自己の完全な責任に帰することはできない、という信念であると表現できる。この能力また達成について、それぞれ偶然性や自己以外への帰因を積極的に評価するような項目として、「人が成功したとしても、それはその人の力だけでなしとげられたものではない」「人間の持ち合わせている才能は、偶然に与えられた部分が多い」という提示文を作成した。一方でこれらに対する反転尺度項目としては、先述したように、達成について自己の内的な統制を重視する信念、個人差であるLoCの内的統制項目が特に関連の深いものとなるだろう。ここではRotter (1966) をふまえて日本版のLoC尺度を開発した鎌原・樋口・清水 (1982) から内的統制項目のうち、尺度分析によって項目-得点相関の最も高かった2項目を選択し、回答者自身から人間一般に関する記述に変更した上で、「幸福になるか不幸になるかは、人の努力次第だと思う」「努力すれば、どんなことでもその人の力のできる」の2項目として採用した。これら4項目について、「そう思う」～「そうは思わない」の4段階尺度として測定した。

【社会的連帯に関する項目】

まず対人関係、ネットワーク規模そのものに関する測定として、「重要なことを話したり、悩みを相談する人数」(「0人」～「5人以上」の6段階)、「携帯電話のアドレス帳の登録人数」、また「今度の正月に差し出す予定の年賀状枚数」を測定した。携帯登録人数および年賀状枚数に関しては、分布を考慮し対数変換を行った上で分析利用した。また、「組織や団体、グループへの参加」として14の種別についてその程度を3段階で聞いたもののうち、私的な仲間・趣味グループに関する3種別を除く11種別について、その3段階の重み付けを単純加算して「組織参加」の程度についての指標とした。

次に連帯に関わる心理的変数として、一般的信頼および異なる意見への寛容性について構成、利用した。前者は「ほとんどの人は信頼できる」「ほとんどの人は正直である」の2項目4段階尺度の合計によって測定され、後者は「親しい同僚」「親しい友人」との間で意見

が違っていてもよいか、それとも同じ方がよいかに関しての4段階尺度の合計として測定された。

【デモグラフィック項目】

本分析においては、性別 (N=1200 中の男性 N=600)、年齢 (平均 44.60, 標準偏差 13.62)、婚姻状態 (既婚 N=793) 学歴 (大卒 N=632)、世帯年収 (1~9 段階, 平均 3.53, 標準偏差 1.78) について測定した。世帯年収については分布を考慮して 11 段階で測定したものを、分布を考慮し最上位の 3 段階についてまとめた上で、無回答反応 (N=188) については最頻カテゴリ (「400~600 万円未満」) に統合する形で処理した。

3. 結果

3.1 「被贈与性」関連項目の構造と尺度構成

まず、被贈与性に関連して構成した 4 項目についてその相関関係について検討したところ、当初前提としていた各 2 項目の反転性を有しておらず、項目反応自体に対してその組み合わせ間で負の相関を有するものは見いだせなかった ($r=.007\sim.356$, $\alpha=.386$)。ここで項目反応を理解し尺度構成を試みるために、この 4 項目に対して主成分分析を行った (表 1)。

先述の「被贈与性」信念に関わる 4 項目について主成分分析を行ったところ、第 1 主成分として、全体に正に負荷し特にその傾向が項目 (1) (3) および (2) においてみられるものが、第 2 主成分としては (2) (4) が正に、(3) および (1) が負に負荷するものが析出された。第 1 主成分が示すのは (努力, また自己の統制の及ばないものも含め) 成功や達成を全体として評価する傾向性、第 2 主成分が本問題で検討した成功の自己外部性、才能の偶然性を評価し、自己統制を負に評価する傾向と考えられ、実際事前の想定通りの負荷構造を構成している。ここでそれぞれの主成分得点を算出し、前者を「達成評価」得点、後者を「被贈

表 1 「被贈与性」項目の主成分分析

	第 1 主成分	第 2 主成分
(1) 幸福になるか不幸になるかは、人の努力次第だと思う (項目肯定率=78.9%)	.666	-.212
(2) 人が成功したとしても、それはその人の力だけでなしとげられたものではない (87.9%)	.452	.511
(3) 努力すれば、どんなことでもその人の力のできる (41.7%)	.560	-.411
(4) 人間の持ち合わせている才能は、偶然に与えられた部分が大きい (58.9%)	.194	.724
分散説明率	.365	.274

Sandel (2007) の「被贈与性」概念をめぐるコミュニタリアニズムの価値観の社会心理学的検討
 与性」得点として後続する分析に利用した。

3.2 被贈与性関連変数の規定要因について

まず、「達成評価」「被贈与性」の両得点について、それがデモグラフィック要因によってどの程度説明されるかについて、重回帰分析を用いて一括して検討した(表2)。

統計的有意性という観点からは、達成評価得点については女性、既婚者が高く、一方で被贈与性得点については女性で高く既婚者において低い傾向が見られているが、全体として効果また説明力が高いとは言えない結果となっている。ここで、年齢および年収は連続変数として検討がなされているが、その高さが達成に対する代理変数という解釈も可能である年収と対比させた時に、年齢が達成評価、また被贈与性との間に持つ関係は必ずしも単純な線形的関係になっていない可能性もある。先行研究として、LoCの年代比較を行った鎌原・樋口(1987)は日本の中学生～大学生を対象に行った研究で、内的統制が加齢と共に減少する結果を示しており、成長・加齢に伴って内的統制が増大するというアメリカ等における知見は反対となっていたことを論じている。このような議論もふまえ、10代刻みの世代変数(5群、各N=240)を作成し、「達成評価」、「被贈与性」得点の世代差を一元配置分散分析で検討したが、群間に有意な差異は見いだせなかった($F(4, 1195) < 1$, $F(4, 1195) = 1.88$)。

3.3 被贈与性関連変数と「連帯」変数の関連について

達成評価得点/被贈与性得点と、連帯に関連したネットワーク規模、また心理変数との関連を検討するために、この両者相互の組み合わせについて、表2の重回帰分析に独立変数として投入したデモグラフィック変数を統制した偏相関係数をそれぞれ計算したものを表3に示す。

表2 「被贈与性」の規定要因

独立変数\従属変数	標準化偏回帰係数 β	
	達成評価	被贈与性
性別(女性ダミー)	.060*	.067*
年齢	-.054	-.014
既婚(ダミー)	.098***	-.085*
学歴(大卒ダミー)	.022	.053
年収	.039	.030
R^2	.014**	.014**

(* $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$)

表3 「被贈与性」項目と「連帯」関連変数との関連

	偏相関係数	
	達成評価	被贈与性
重要他者人数	.141***	-.011
携帯電話件数 (対数)	.138***	-.031
年賀状枚数 (対数)	.174***	-.060*
組織参加 (11 組織)	.056	.038
一般的信頼 (2 項目)	.207***	-.088**
異意見への寛容性 (2 項目)	.053	.054

(* $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$)

達成評価得点は、全般にネットワークの規模に関わる変数、さらには一般的信頼と弱い正の相関を示していたが、被贈与性得点との間にはほぼ関連を有していないという結果になっていた。

3.4 補足的分析：健康度等との関連

鎌原ら (1982) は、LoC の内的統制が、抑うつ傾向と負の相関を持つことを指摘している。ここでは調査において測定された主観的健康度 (4 点尺度 2 項目)、人生への満足 (4 点尺度 5 項目) の 2 変数について、上記のデモグラフィック変数を統制した偏相関係数を達成評価得点/被贈与性得点との間に算出した。その結果、主観的健康度との関連については $r = .191$ ($p < .001$) vs. $-.093$ ($p < .01$)、人生への満足とは $r = .279$ ($p < .001$) vs. $-.127$ ($p < .001$) となっており、達成評価はこれらの指標と正の相関を持ち、被贈与性は負の相関を持っている結果となっていた。

4. 考察

ここまでの分析結果をまとめると、まず尺度構成においては、本研究で探索的に構成した被贈与性に関する項目は一定の内部相関を持ち、「自己統制か被贈与性」か、といった対極的構造を持っているとは言えない結果となっていた。分析的に構成した被贈与性得点 (また達成評価得点) をめぐる分析からは、まずこれらがデモグラフィックな属性からは十分には説明されないことを示しており、その中には学歴や年収のような、「達成」の意味合いを持つものを含んでいた⁶⁾。また達成評価がネットワーク形成、また一般的信頼と関連する一方で、被贈与性得点は必ずしもそうではないという結果となっていた。健康度等との関連からも、達成評価また被贈与性は、いわば内的—外的統制に関わる従来の知見と整合的な結果を

有していた。全般としては Sandel (2007) の議論するように、被贈与性の信念を持つことが社会的連帯の基盤にあるというメカニズムを直接に支持するような結果を本論で行ったデータ取得、また分析から得ることはできなかった。この結果からは、方法論的課題によって検証の手続きが不十分であった可能性と、この命題が（とりわけ、調査の対象となった日本文化という文脈においては）妥当ではなかったという可能性があるが、この両面から考察をしておきたい。

まず第一に方法論的には、「被贈与性」に関連した尺度構成上の問題が考えられる。表1に示した各項目の肯定反応率（4段階反応のうち「そう思う」「ある程度そう思う」を加算したもの）を見ると、そもそも「幸福になるか不幸になるかは、人の努力次第だと思う」「人が成功したとしても、それはその人の力だけでなしとげられたものではない」といったステートメントは大半の調査回答者によって肯定されるものとなっており、個人差を顕著に示すものとはなっていない。前者に関していえばそもそもの「努力」についての肯定的評価、また後者については、例えばスポーツ選手の記者会見などにおいてよく見られるように、成功を専ら自らの達成によるものとせず周囲に帰するような文化的規範、また社会的望ましさによる反応の結果とも言えるかもしれない。一方でこれに対して「努力すれば、どんなことでもその人の力のできる」や「人間の持ち合わせている才能は、偶然に与えられた部分が多い」については項目の反応が肯定・否定方向に分かれる結果となっていた⁷⁾。前者については「どんなことでもその人の力で」、また後者については「才能が偶然に与えられた」などの表現がこのような反応をもたらしている側面があると考えられるが、今後、被贈与性をめぐる問題について尺度構成を検討する際には、ワーディングについて注意すべき手が必要となるだろう。なお、主成分分析を通じて被贈与性と達成評価がそれぞれの主成分として析出されたことについても、この被贈与性が人々の信念の構造の中でどのように捉えられているかということを理解する上で重要であると思われる。このような信念の構造をめぐる問題については、自由回答などを利用した検討などの質的アプローチも有用なものとなるだろう。

測定をめぐる問題としては同様に、「社会的連帯」に関する課題も考えることができる。今回の分析結果からは、達成評価得点の高い調査対象者において、実際のネットワーク形成や集団所属などが多いという結果になっていた。ここで、そもそも自己の達成のためには周囲の対人関係から得られるものを利用することが必要なことも少なくないと考えられるため、例えば自己の達成が完全に統制可能であると考えよう人間においては、必要なリソースを得るための「コネ作り」など、道具的にネットワークを形成する行動もありえるだろう。このとき、「社会的連帯」のラベルで測定されたような変数、諸概念についても、自己にとって統制可能な環境の一つであるという認識もありえる（一方で、達成評価得点については一般的信頼とも正の相関を有していたが、異なる意見への寛容性については両得点とも相関を示していなかったことも興味深い）。その意味では「連帯」が何を意味するのかについて、

今一度検討する必要があるとも言えるだろう。

また、加えて分析手法的な可能性としては、「被贈与性」を何らかの変数と組み合わせる方向性が考えられる。これは、達成評価と被贈与性の独立性からも示唆されるだろう⁸⁾。今回は調査項目、変数の不足により十分な検討を行うことができなかったが、コミュニティアニズムと他の価値観との類似点、また異同点を検討した上で、他の心理的諸変数と組み合わせる分析を行うことが求められる。

上記のような分析上の視点とも関わるが、被贈与性の信念と他の信念や価値観との関連について検討することも有用なものであるように思われる。直接的にもっとも関連が深いものとして、第一に宗教的信念が挙げられる。実際 Sandel (2007) においては、この被贈与性の信念が宗教的色彩を帯びているという指摘がありうることを認めており、さらにその上でこの概念が、特定・単一の宗教や形而上学的背景を仮定しなくとも理解可能なものであるということを主張している。一方でコミュニティアニズムの論者が、宗教的バックグラウンドを多く持っていること、とりわけコミュニティ性を重視するユダヤ教（あるいはカトリック）の伝統を背景にしていることが少なくないことはこれまでの議論の中でも指摘されてきた（小林, 2010; 榎木, 2012)⁹⁾。一方で、世界価値観調査の知見としてもよく知られたインゲルハート＝ヴェルツェルの文化地図（Inglehart & Welzel, 2005）においては、儒教文化圏に属する日本は、世界的にも最も世俗的で合理的な文化に位置づけられ、サンデルの被贈与性の議論の登場した英語文化圏の米国とも大きく異なる様相を示している¹⁰⁾。本分析においては被贈与性についての仮説が支持されていないが、この概念が宗教的な意味合いを帯びるものであるとするのならば、これは非宗教的であり世俗性の高い日本文化における結果として捉える余地もあり、このような価値観システムの文化比較を行う必要性を示唆するものである¹¹⁾。

もっとも被贈与性の信念はサンデルの議論にもあるように、必ずしも宗教的前提を置かずとも理解可能であるとも考えることができる。先述のスポーツ選手が会見等において自らの達成を周囲に与えられたものと考えるのはその一例であり、また「おかげさま」のような語彙が全体として指しているものに内包される意味合いなどにも、自己の統制によらない諸力を意識する感覚が含まれていると考えることができる。一般の論説の中でも、運の認識の重要性を指摘するものもある。経済学者の大竹文雄は朝日新聞に掲載されたインタビュー記事の中で、「所得の高い人は自分が運がよかった面があると自覚すべき」こと、また「運・不運」によって決まる部分が大きいことを意識する価値観で再分配制度を認めるべきことを主張している（朝日新聞 2013 年 5 月 25 日付東京本社版朝刊¹²⁾。このような価値観の様態については、尺度構成の問題のところでも述べた自由回答、あるいはメディア記事、またネット上などで得られるさまざまな言説を用いた内容分析とその時系列分析なども今後有効な手法となるだろう。

謝辞：本研究は、2012年度の東京経済大学個人研究助成費（研究番号 12-16）を受けた研究成果である。また一部は2013年度の日本社会心理学会第54回大会において報告された（柴内康文（2013）、「被贈与性」の信念は連帯の基盤か：Sandel（2007）仮説の検証の試み 日本社会心理学会第54回大会発表論文集244.）。一連の作業の中でご相談させていただいた方々、また成果報告において未熟な検討に対し貴重な、また建設的なご意見をいただいた方々に深く感謝申し上げます。

注

- 1) 小林（2010）はサンデルの立場はリベラルやリバタリアニズムであれば主張する「目指さなくてもよい」ではなく、「目指すべきではない」であるので、本書の訳題についてはミスリーディングな可能性があるとして指摘する。
- 2) ただし、この議論はあくまで「遺伝的資質」という文字通りの意味での「天賦の才」、生来の才能が達成に与えた影響に関するものであることには注意を要する。
- 3) ソーシャルキャピタル論の主要書の一つであるPutnam（2000）においても、「コミュニタリアン」（また「コミュニタリアニズム」）という単語の使用を随所に見出すことができる。またDelanty（2003）はパットナムの立場をコミュニタリアニズムの一類型として整理している。
- 4) また、ソーシャルキャピタル形成に関わる実践的な観点からも、この認知的ソーシャルキャピタルは構造的なものとは比べて取り扱にくい側面を有していると言えるだろう。例えば北海道知事政策部（2006）は、地方自治体がソーシャルキャピタル形成に関して取り得る政策について、「個人の価値観と強く結びつく認知的ソーシャルキャピタルへの関与は難しい」としている。
- 5) 『週刊東洋経済』（2010年8月14・21日合併号）に掲載されたノーランチャートでは、政治的・経済的自由を重視しない思想のラベルとして「コミュニタリアニズム」が付置され、極端な形として「共産主義」「全体主義」となると解説されている。
- 6) この点で、婚姻状態（既婚ダミー）が、達成評価と正に、また被贈与性と負に相関する方向であったことは興味深い。
- 7) またこの二項目間の反応については $r=.023$ と相関が示されていない。
- 8) ただし達成評価得点と被贈与性得点の積を算出した上で、それを交互作用項として用いて各種分析における関係性を検討したが、今回の報告において一貫的に解釈できる結果は得られなかった。
- 9) ソーシャルキャピタル論のロバート・パットナムも著書『孤独なボウリング』（Putnam, 2000）の中ではユダヤ教の伝統について触れることが少なくなかった。また彼らの手になる近刊（Putnam & Campbell, 2012）は宗教と社会的連帯に関する著作であり、同書の中では著者らの宗教的ルーツについて語られているところも興味深い。
- 10) 世界価値観調査に関連して、この調査には「勤勉か、それとも運やコネか」といった志向性に関する質問項目があり、その各国比較を行った分析として寺地（2009）が挙げられる。それによれば、日本社会においては、勤勉（努力）に対する信仰度と運命に対する態度に相関がなく反応が中立的であり（一方でアメリカ、オーストラリア、韓国、中国、ドイツなどでは勤勉信仰度と、運命は自分自身で決定するという傾向性に有意な正の相関が観察される）、その内実

については他国とも比較した類型化がもとめられるという。

- 11) 小林 (2012) は、コミュニタリアニズムにおける「善ありし正義」は東アジアの文化的伝統、特に儒教における「義」の観念と通底する部分があると論じている。
- 12) 関連して、大竹 (2005) は所得がどのような要因で決まっているかについて選択や努力、また運、才能、階層などの項目を提示してたずねた調査結果を報告し、人々が最近の貧困の背景に非自発的要因を想定しているという解釈を提供している。またそこでは先行研究をまとめて、運が所得を決めていると考える人が多いほど、GDP に対する政府の移転支出割合が高いこと、またそのように考える人ほど、政治的には左派である確率が高いことを紹介している。大竹 (2010) は世界価値観調査の結果を用いて、近年の日本人が勤勉さでなく「運やコネ」を重視する価値観を持つようになったこと、それへの不況の影響や反市場主義との関連について論じている (また同書では宗教も含めた価値観や文化と経済の関係についてもレビューされている)。

引用文献

- Delanty, G. (2003). *Community*. London: Routledge. (山之内靖・伊藤茂 (2006). コミュニティ：グローバル化と社会理論の変容 NTT 出版)
- 鎌原雅彦・樋口一辰 (1987). Locus of Control の年齢的变化に関する研究 教育心理学研究, 35, 177-183.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982). Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- 菊池理夫 (2007). 日本を甦らせる政治思想：現代コミュニタリアニズム入門 講談社
- 小林正弥 (2010). サンデルの政治哲学 平凡社
- 北海道知事政策部 (2006). ソーシャルキャピタルの醸成と地域力の向上：信頼の絆で支える北海道 (http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/ssa/grp/01/h17_sczenpen.pdf)
- Inglehart, R. (1990). *Cultural Shift In Advanced Industrial Society*. Princeton University Press. (村山皓司・富沢克・武重雅文 (訳) (1993). カルチャーシフトと政治変動 東洋経済新報社)
- Inglehart, R. & Welzel, C. (2005). *Modernization, Cultural Change and Democracy*. Cambridge University Press
- Jagodzinski, W・真鍋 一史 (2013). 国際比較の視座からする宗教性の類似性 関西学院大学社会学部紀要, 116, 83-100.
- 松谷満 (2009). 価値変容と政党選好 丸山真央他 World Value Survey (世界価値観調査) を用いた実証研究：政治・家族 (SSJDA リサーチペーパーシリーズ 41), pp. 5-24. (<http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/rps/RPS041.pdf>)
- 宮川公男 (2004). ソーシャル・キャピタル論：歴史的背景、理論および政策的含意 宮川公男・大森隆 (編) ソーシャル・キャピタル：現代社会のガバナンスの基礎 東洋経済新報社 pp. 3-53.
- Mulhall, S., & Swift, A. (1996). *Liberals and communitarians* (2nd ed.). Oxford: Blackwell. (谷澤正嗣・飯島昇藏他 (訳) (2007). リベラル・コミュニタリアン論争 勁草書房)
- 大竹文雄 (2005). 日本の不平等：格差社会の幻想と未来 日本経済新聞出版社

Sandel (2007) の「被贈与性」概念をめぐるコミュニタリアニズム的価値観の社会心理学的検討

大竹文雄 (2010). 競争と公平感：市場経済の本当のメリット 中央公論社

Putnam, R. D. (2000). *Bowling alone: The collapse and revival of American community*. New York: Simon & Schuster. (柴内康文 (訳) (2006). 孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生 柏書房)

Putnam, R. D., & Campbell, D. E. (2012). *American grace: How religion divides and unites us*. New York: Simon & Schuster.

Rawls, J. (1999). *A theory of justice*. Belknap Press.

Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological monographs*, 80, 1-28.

Sandel, M. J. (1998). *Liberalism and the Limits of Justice* (2nd ed.). Cambridge University Press. (菊池理夫 (訳) (2009). リベラリズムと正義の限界：原著第二版 勁草書房)

Sandel, M. J. (2007). *The Case against Perfection*. Belknap/Harvard University Press. (林・伊吹訳 (2010). 完全な人間を目指さなくてもよい理由 ナカニシヤ出版)

寺地幹人 (2009). 日本社会における「努力」と「運」の関係・序 土岐智賀子他 World Value Survey (世界価値観調査) を用いた 実証研究：労働・幸福・リスク (SSJDA リサーチペーパーシリーズ 40), pp. 5-24. (<http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/rps/RPS040.pdf>)

榎木憲一郎 (2012). 宗教 小林正弥・菊池理夫 (編) コミュニタリアニズムのフロンティア 勁草書房 pp. 90-108.